宮城は現在(いま)も現実(いま)に立ち向かう。

2017.3.11

NOW IS.

Vol. 11

毎月11日発行

ナウイズ

撮影地：石巻市日和山公園

南浜地区のジオラマ
石巻専修大学の研究室が、震災前の街並みを3Dプリンタで忠実に再現。

南浜つなぐ館
VRで見る被災直後の街の様子は、臨場感たっぷり。

富貴丁通り 大正から昭和にかけて賑わいを見せた通り。街並みを活かしたリノベーションを施し、カフェや雑貨店が開店しました。

石巻市復興まちづくり情報交流館中央館
館長のリチャードさんはイギリス出身。「もう日本の暮らしの方が長い。石巻は私のふるさとです」。

八幡家
再建したお店の前で。うなぎ弁当の包装紙には、たい平さんが書いた文字が使われています。

「石巻で買えるものは石巻で買ってます」。視察の途中、なじみの靴店で買い物する一コマも。

石巻は、日常の幸せがいっぱい詰まった場所になるんじゃないかな。

日和山公園「たい平桜」

原点であり、第二のふるさと、石巻。たい平さんの熱い心意気を感じる旅。

落語家としての出発地点 石巻に自分ができること

真っ青に晴れ上がった空。凪いだ海に冬の太陽が反射しキラキラと輝きます。「まるで鏡のようだ」。林家たい平さんはそう言って、静かな海を見つめました。

たい平さんにとって石巻市は、落語家としてのスタート地点。「自分は道を究めることができるのか、大学生時代、悩みを抱えながら訪れたのがこの地でした。石巻の人たちは、心の奥深いところがあったかい。お金もない、着物とふんどしで歩く得体のしれない若者に、優しく接してくれました。老人ホームで落語をさせてもらったり、店の人と話をしているうちに、気持ちが定まっていったように感じます」。日和山公園の北側には「たい平桜」と名付けられた木があります。旅の途中、たい平さんが記念撮影をした木です。「ここに来た当時、この木はまだ、腕の太さほどもない若木だったんですけどね。今はこんな立派な枝ぶりになりました」。

そんな想いのある場所だからこそ、東日本大震災はたい平さんにとっても、胸がえぐられるような出来事でした。被災後、初めて訪れたのは平成23年4月。言葉が出なかったと言います。「この地で暮らす人たちの命が途切れ、生活が途切れてしまった。想像を絶することだと思います。自分に何ができるか、真剣に考えました」。大きなことはできない。でも、この現状を多くの人に知ってもらいたい。そう考え、首都圏などの人々を石巻に招く「石巻応援バスツアー」を始めました。「今年で11回目を迎えました。参加した方にとって石巻が特別な場所になれば、それがこれからの復興の力になるのでは、と考えています」。

“なじみ”をめぐり 励まし、話し続ける

石巻市には、たい平さんの「なじみ」がたくさんあります。昼食に訪れた「八幡家」のおかみ阿部紀代子さんは、被災直後にまちの行く末を語り合った仲間のひとり。たい平さんに力づけられ、店の再建を決めたと阿部さんは話します。「大正二年から続く自慢の店が津波で全壊し、気力を失って、もうやめるつもりだったんです。でも『阿部さん、ぜったいに続けたほうがいい』と言われて、ここまでできました」。木のぬくもりを活かした店は、趣のある細い路地に面しています。ネコの島で有名な「田代島に向かう港が近くにできるから、ここも猫の路地にしたいの」と、近所の人と猫の置物を置き始めました。「まちのことまで考えられるくらい、元気になった。自分のことのように、うれしいです」とたい平さんは満面の笑み。

「石巻市復興まちづくり情報交流館中央館」の館長リチャードさんも仲間のひとり。「冗談を言い合いながら、近況を話し合います。「最近は外国人が視察に来ることも増えてきたから、外国人のぼくがここにいるのは、とっても大事なことなんです」とリチャードさん。軽妙なトークで、石巻の現状を伝えるキーパーソンになっています。

古い木造建築をリノベーションし、震災後賑わいを見せている富貴丁通りでは、興味深々のたい平さん。落語に出てくる長屋のようだ、と見入ります。「震災を契機に若い人が集まり、100年前の街並みが再活用されている。いいですね。元気が出ます」。

震災伝承施設「南浜つなぐ館」では、被災直後の映像をVRで体験しました。「6年前にみた風景がよみがえります。でも、石巻市はここから一歩一歩進んでいます。来るたびに道が変わって、新しい建物が増えてくる。今日あちこち歩いて、震災前よりいいまちにしよう、というパワーを感じました。これから石巻は、何気ない、日常の幸せがいっぱい詰まったまちになるんじゃないかな。ここに来ると、今一番出会いたい人に出会えるような。また来ますよ。ずっと来ます。自分に何ができるか、ずっと考え続けます」。

執筆：沼田佐和子

今回訪れたまち

宮城県東部に位置し、人口が仙台市に次いで県内第2の都市。三陸沖から多彩な魚の水揚げがあるほか、米やイチゴの栽培も盛んです。北上川の河口近くには石ノ森萬画館があり、あちこちで石ノ森まんがのモニュメントが見られます。

PROFILE

林家 たい平（はやしや たいへい）

1964年生まれ、埼玉県秩父市出身。落語家として、『笑点』大喜利メンバーとして、ドラマやバラエティなど多方面で活躍する。妻が宮城県仙台市出身であるという縁もあり、東日本大震災後は、石巻市を中心に被災各県の沿岸部で慰問やボランティア活動に従事した。

VOICE of KEY PERSON

貴方が大いれば夫

01

この人がこの町を盛り上げてます！

雄勝硯を後世に伝えていきたい。

時代とともに進化 製品に彩を加える

「雄勝地区は過去、何度も津波の被害を受けましたが、その度に立ち上がり、特産品である雄勝硯もまた600年以上伝統が続いてきました。東日本大震災でも甚大な被害を受けましたが、先人が続けてきたことを、我々が途絶えさせるわけにはいかないと気持ちを奮い立たせました」と語る千葉さんは宮城県名取市出身。結婚を期に雄勝地区に移住してきました。雄勝硯が経済産業大臣から伝統的工芸品の指定を受けた昭和60年から31年間、雄勝硯生産協同組合に勤務しています。

雄勝石は、黒色硬質粘板岩で粒子の均質さ、光沢などの優れた特徴があり、室町時代から硯の原料として使用されてきました。JR東京駅にも屋根のスレート材として採用されています。

「伝統的工芸品の指定は受けたものの、職人の高齢化や後継者不足など、衰退が目に見えていた状況でした」。そこで一定の需要が確保できる生活に直結した商品開発を進めました。「雄勝出身ではない私が携わることで、多角的な視点から試みができたのではと思っています」。花器やテーブルウエアなどが開発され、特に雄勝石皿は食洗器対応など技術面でも進化し、雄勝石が硯を含めて知られるようになってきました。そんな時に東日本大震災が起きます。

6、500人以上のボランティアの協力もあり、11月までに仮設の工場や店舗、事務所を開設し、震災翌年には採石作業も再開。平成27年には、ローマ在住の彫刻家、武藤順九さん発案による「マイ硯」運動が立ち上がります。世界に一つだけの「マイ硯」を作ってもらうことで、書写や雄勝硯への関心、魅力を再認識してもらい、まちの復活、再生につなげています。

「墨を磨ることで精神統一ができますし、墨の香りにはアロマ効果もあるんですよ。これからも雄勝硯を広めるとともに、現在は若手職員の育成にも励んでいます。後世に伝え、歴史をつなげていきたいと思っています」。

雄勝硯生産販売協同組合
事務局長
千葉（ちば） 隆志（たかし）さん
●問合せ先／TEL0225-57-2632

雄勝硯と雄勝石製品

内から支えるマンパワー じもと ISHINOMAKI お助け 外からのサポートパワー

NOW IS ISHINOMAKI NOW IS ISHINOMAKI NOW IS ISHINOMAKI NOW IS ISHINOMAKI NOW IS ISHINOMAKI NOW IS ISHINOMAKI NOW IS ISHINOMAKI NO

石巻市役所
石巻市復興事業部
半島拠点整備室 技師
阿部（あべ） 一輝（かずき）さん
平成27年4月から
新潟県新潟市より石巻市へ派遣

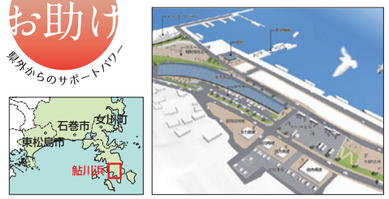
VOICE of KEY PERSON

貴方が大いれば夫

02

この人がこの町を盛り上げてます！

一刻も早く整備を進め被災地の方々の役に立ちたい。



鮎川浜完成イメージ

半島拠点整備室での派遣職員は阿部さんひとり

早期事業化エリアとして鮎川浜の復興を先導

「入庁2年目の時、派遣の打診を受け、経験の浅い自分が役に立てるのだろうかと不安もありましたが、被災地の方々のためにがんばりたいという思いの方が強かったですね」と語る阿部さんは、生まれも育ちも新潟市。大学を卒業してから民間企業に就職し、横浜で働いていましたが、人の役に立つ仕事がしたいと新潟に戻り平成25年に入庁。平成27年4月に石巻市に派遣されました。

半島拠点整備室では、雄勝、鮎川浜、北上の3つの地区を整備しており、阿部さんは鮎川浜地区を担当しています。鮎川浜は牡鹿半島南端の浜。かつて捕鯨産業で栄え、現在は、漁業のほか、手つかずの自然が残る金華山への玄関口として観光業も主要な産業となっています。津波で浜辺近くの低平地にある建物はほとんど流されました。現在、防災集団移転団地などの「住居ゾーン」と商店街などの「商業・観光ゾーン」を早期事業化エリアとし、鮎川浜の復興を先導するエリアとして整備を進めています。

派遣当初は、整備地の用地買収に向けて住民説明会やその関連業務に携わりました。その後は、住まいやインフラ整備に向けた調整業務を行い、今年2月から鮎川浜地区の本格的な工事が始まりました。「地元の民宿経営者や商工会関係者でつくる『鮎川港まちづくり協議会』の方々から、まちづくりに対する想いにふれる機会があり、一刻も早く整備を進めようと業務により力が入るようになりました」。

「平成30年には地盤整備が完了予定で、その後、施設の建設が始まります。観光物産交流館、環境省国立公園施設ビジターセンター、おしかホエールランドの3施設の建設が予定され、復興が目に見えて分かる段階になります。公園や緑地も整備されるので、住民が暮らしやすく、たくさんの観光者が来てくれるような鮎川浜にしていけたらと思っています」。

Newspaper 石巻市 Pick-Up

震災当時と今の河北新報記事から見る、復興の歩み。

2014.3.14 すっかり変貌した街の顔

「JR石巻駅前の商店街や周辺の住宅は水浸し。場所によっては深さが依然、1メートルを超す。繁華街の面影は全く見えない。市庁舎の周りも深い水に浸かった。一部地域で電気が復旧した以外、ライフラインは機能していない」。平成23年3月14日の記事には、震災から3日目の石巻市中心市街地の様子が記されています。掲載された写真からも、街の顔がすっかり変わってしまった様子が分かります。

石巻市は平野部の約30％が浸水。多くの人が避難所での生活を余儀なくされました。「地震発生以降は、ほとんど何も食べていない」という避難者の言葉からも、当時の疲労感が伝わってきます。

石巻一変 街の顔浸水、市民ぼうぜん

2015.3.13 被災商店街の門出を祝福

平成28年10月23日の紙面では、前日に石巻市中央1丁目の「中央一大通り商店街」で開催された、まちびらきの様子が掲載されました。中心市街地にある同商店街は、津波で大きな被害を受けた地区。東日本大震災に伴う土地区画整理事業により、道路幅を広くし歩きやすくし、空間を確保し、鮮魚や精肉、弁当、生花など14店舗がそろう商店街に生まれ変わりました。

当日は、歩行者天国にした商店街に芋煮やコーヒーなどの出店が並び、大勢の地域住民がその門出を祝福。出店者も「今後も人が通りたくなるような魅力あるまちづくりをしたい」と意気込みを示しました。

震災受け区画整理 石巻・中心部商店街

まちびらき 再生祝う

© 河北新報社　※記事の詳細はみやぎ復興情報ポータルサイトに掲載します。

AR で見る 定点観測

look at Miyagi

現在の石巻市

撮影地 中瀬

宮城県東部に位置し、県内第2の人口を抱える石巻市。市域の多くが太平洋に接しているため、東日本大震災で最多の3、600人以上の尊い命が失われました。

震災から6年経過した現在も、不自由な生活を余儀なくされている方もいますが、昨年はJR石巻あゆみ野駅、新たな石巻市立病院が開業するなど新しい街の基盤ができつつあります。

被災直後の石巻市中瀬

無料アプリ「**ココアル2**」を起動し、上記の被災直後の写真にかざすと、現在（平成29年1月）の石巻市の様子がご覧いただけます。

COCOAR2 のダウンロードは「Google play」「App Store」から

COCOAR2に対応していない端末もございます。

震災前の石巻市
（トヤケ森山から市街地を臨む）

（写真提供：石巻市）

無料アプリ「ココアル2」をダウンロードしてご覧ください。

TOPICS 1

NOW IS / NEWS in MIYAGI

復興や防災にまつわるニュースをお知らせします。

NEWS 01 「みやぎ地域復興支援助成金」平成29年度事業募集のお知らせ

県では、NPO等が行う東日本大震災に係る支援活動に対する助成を行っています。詳しくは左記問い合わせ先までご連絡ください。

●募集概要

(1)対象事業

総合タイプ	①…被災地域の課題解決を目指す事業 上限1000万円、下限50万円 1年目:9割以内助成　2年目:8割以内助成 3年目:7割以内助成
	②…被災者生活支援に特化する事業 上限300万円、下限50万円　10割以内助成
	③…被災地の空き家等既存施設を改修した拠点を活用し、復興を推進する事業 上限1000万円うち施設改修上限600万円、下限300万円 改修経費は5割以内助成。その他経費は、 1年目:9割以内助成 2年目:8割以内助成 3年目:7割以内助成 ※ただし、任意団体は①②のみ申請可とし、いずれも上限300万円

(2)募集期間
4月7日(金)まで

問.県地域復興支援課 ☎.022-211-2424
http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/tisin/

NEWS 02 「みやぎ被災者生活支援ガイドブック」を発行しました

震災により被災された方々の生活再建に係る各種支援制度の概要と、その問い合せ先を掲載した「みやぎ被災者生活支援ガイドブック(平成29年1月版)」を発行しました。

ガイドブックは、応急仮設住宅にお住まいの方などにお届けしています。

また、県や市町村の窓口等で配布するほか、県ホームページでもご覧いただけますので、どうぞご活用ください。

問.県震災復興推進課 ☎.022-211-2408

詳しくは、みやぎ被災者生活支援ガイドブック 検索 で検索

NEWS 03 「3・19さぁーいぐべし かどのわき復興まちびらきイベント」

東日本大震災で大きな被害を受けた「石巻市門脇町」は、道路や復興住宅の完成により、新しいまちに生まれ変わりつつあります。皆さんと新しいまちの誕生をお祝いする「まちびらき」を行いますので、ぜひお越しください。

日時／3月19日(日)9時半～14時まで
場所／石巻市新門脇地区内(旧門脇小学校南側)
見所／日高見太鼓、渡波獅子風流など
楽しいステージと美味しいグルメが勢ぞろい！
石巻物産市も開催します。
問.かどのわき復興まちびらきイベント事務局
☎.022-288-6083　http://kadonowaki-hukkou.com/

NEWS 04 ご支援に感謝を込めて「マンガッタン感謝祭」を開催

平成25年3月23日、全国各地の皆様より多くのご支援を頂き、石ノ森萬画館はリニューアルオープンを果たし、今年で4周年を迎えます。

今までご支援くださった皆様へ感謝の気持ちを込め、「マンガの力で全国に笑顔を発信」をテーマに「マンガッタン感謝祭」を行います。

日時／3月25日(土)・26日(日)9時～18時まで
場所／石ノ森萬画館
定休日／第3火曜日(祝日の場合は翌日)
料金／大人800円、中高生500円、小学生200円
問.石ノ森萬画館
☎.0225-96-5055

NOW IS./ MIYAGI

MEDIA INFORMATION

今の被災地をリアルタイムで

ＳＮＳでは、取材チームが見た被災地のいまを発信しています。Facebook、Instagram、Twitterでご覧ください。皆さまからの投稿もお待ちしています。ハッシュタグ「#fukkomiyagi」をつけて、撮影した画像をお寄せください。

@日和山公園(石巻市)
[2017/2/12]

各SNSの検索窓で いまを発信！復興みやぎ 検索

復興情報をお伝えします

宮城の復興情報を発信する、「みやぎ復興情報ポータルサイト」を公開しています。復興に関するお知らせや復興の進捗状況、NOW IS.取材チームによるブログで情報を発信します。

みやぎ復興情報ポータルサイト　http://www.fukkomiyagi.jp

TOPICS 3

明日への取り組み：むすび塾

河北新報 防災・減災 巡回ワークショップ

被災地を実際に見る、聞くことの重要性を認識

平成29年1月27日～29日「共催むすび塾@被災地」として、過去にむすび塾を共催した全国8カ所(北海道、関東、東海、近畿、四国、九州)の地方紙・放送局記者と、同じくむすび塾に参加した住民を宮城県に招いて開催されました。約30人が震災6年を迎える被災地で、地域防災に必要な視点を確かめ合いました。

一行は3日間を通して、南三陸町や気仙沼市などの5市町7カ所を視察。被災者や語り部が説明しながら、南三陸町戸倉小学校の児童たちが駆け上がった避難ルートを実際に歩き、震災遺構として残る南三陸町の高野会館や気仙沼市の気仙沼向洋高の旧校舎などを視察しました。

一般参加者は、被災地に入るのは初めての人がほとんど。震災語り部や被災者の経験談を基に、実際に被災地を訪れることの重要性を認識。今後は語り部を招くなど、より地域住民の備えを深めたいとの意見がでました。

地方紙・放送局記者の多くは防災担当。防災啓発活動に関して、響いているか実感がわかないなどの悩みも上がり、防災を「わがこと」としてとらえてもらうために、ツアーなどの被災地を訪れてもらうような仕掛けづくりも使命ではないかとの意見もでました。

河北新報社防災・教育室の武田真一室長は「メディアは、研究者や語り部をつなぐことができる。紙面や番組づくりだけではなく、メディアの特性をもっと発揮すれば可能性は広がる」と述べました。

共通して言えるのは、防災を「わがこと」としてとらえてもらうために「被災地を訪れる」「被災者の話を聞く」こと。震災の教訓を「発信する側」と「受け取る側」を地域メディア、そして行政や企業などが一体となり、つなげていくことが大切です。

むすび塾とは

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社が開催する巡回ワークショップ。「いのちと地域を守る」キャンペーンの一環として、平成24年5月から月1回、町内会や学校、企業などで開催し、平成29年2月で通算64回目となりました。

目的は、対談を通して震災時の教訓や減災・防災への備えを、あらためて考え直すこと。

ワークショップの様子は、河北新報紙面でも公開し、防災や復興への行動を後押ししています。

今までの「むすび塾」の記事は河北新報社のwebサイトでご覧いただけます。

http://www.kahoku.co.jp/special/bousai/

STAFF'S VOiCE

取材こぼれ話

編集後記

「感謝しかない」「忘れちゃいけない」「絆が大切」。東日本大震災のあと、あちこちで聞くようになった言葉です。食傷気味の人もいるでしょう。私自身もそうでした。けれども、実際に現地に足を運び、その地で生きる人たちからこの言葉を聞くと、素直に「本当にそうだな」と思うのです。生の声の力は、底知れない。被災地の言葉を伝えるのが『NOW IS.』の役割ですが、私たちが100伝えても1回の訪問には及ばないと感じています。今こそ、被災地へ。大切な言葉を、その耳で聞いてください。

石巻市南浜地区の慰霊碑。
手を合わせるたい平さん。

宮城県の東日本大震災死者数(関連死含む) 10,556人 | 行方不明者数 1,233人　平成29年1月31日現在 宮城県危機対策課調べ

NOW IS. 防災

もしものときにあなたを守る、
防災のヒントを、
12回にわたって紹介します。

Theme 11 災害の伝承

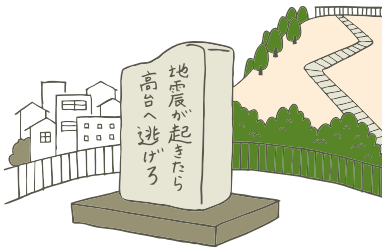
**災害で感じたこと、学んだことを、
子どもたちや、ほかの地域に暮らす人に伝えていくには
どのような方法で、どのようなことを伝えていけばよいのか―。
まずは自分にできることから、はじめてみましょう。**

供養

月命日など区切りの日に手を合わせる習慣を

慰霊祭などの大きな行事としての供養ではなく、月命日など区切りの日に、過去の災害を想い、そっと手を合わせてみましょう。日常のなかに組み込むことで、自然な形で災害の伝承をしていくことができます。

文字



簡単な言葉で分かりやすく残そう

石碑やモニュメント、記録誌など、災害の記憶を文字で残すときは、伝えたいことを端的に記しましょう。また残して終わりではなく、例えば防災訓練に取り入れるなど、活用していくことが大切です。

語り

事実や数字よりも感じたことを伝えよう

災害時に自分が感じたままに伝えることが大切です。どういう行動を取ったか、災害に直面したときにどう感じたのか、明日はどうしようと思ったのか。体験者のリアルな話は、聞く側の備えにつながります。

取材協力：東北大学災害科学国際研究所　川島 秀一 教授

防災コラム Vol.11

★まずは身近な人に、分かりやすく！

★いろいろな方法で伝えていこう！

★地域を知って、防災に生かそう！

災害の伝承で大切なのは、多くの人に伝えるよりも、自分の子どもや身近な人に分かりやすく伝えること。供養・文字・語りなどを組み合わせて伝えていきましょう。災害は、地域によって避難場所や性質が違います。伝える側として、まずは自分たちが暮らす地域の歴史や地形を知ることからはじめ、それを災害伝承や防災に生かしていきましょう。

川島 秀一 教授
東北大学災害科学国際研究所

人間・社会対応研究部門災害文化研究分野に所属。日本全国の災害伝承を収集し、生活者視点の真の防災の在り方を考える。自身も気仙沼で被災し、自宅が流失。

NOW IS. Vol.11 ナウイズ
昨年度までの「みやぎ復興プレス」をリニューアルしました。

発行：平成29年3月11日　宮城県震災復興本部（事務局：震災復興推進課）
〒980-8570　宮城県仙台市青葉区本町3丁目8番1号
Tel：022-211-2443　Fax：022-211-2493
『復興情報発信プロジェクト NOW IS.』は、宮城の復興の「いま」を伝えるプロジェクトです。

宮城県
Miyagi Prefectural Government